

会議を

人をつなぐ、 人がつながる手段に

2015年も ナンバーワン

陸前高田市は震災前からさまざまな取り組みを展開してきた結果、2000（平成12）年にはほぼ県平均だった女性の平均寿命が、東日本大震災の前年の10（平成22）年には岩手県ナンバーワンになっていました。保健統計はいろいろな要因の影響を受けるため、必ずしも絶対的な評価指標とはいえ、一回の数値だけで判断はできません。このことから、震災後の15（平成27）年の結果を心待ちにしていたのですが、再

ことがよいのか、すなわち「つながり方の質や方法」によって人が健康になる度合いが変わるのか否かを検証することが急務ともいえます。本稿では主に行政が仕掛けるつながりの場である「会議」をどのように運営すれば、人をつなぐ、人がつながる手段になるかを考えてみました。

会議のための会議

会議と聞くと、集める方も集められる方も何となく面倒だな……というのが本音だと思います。会議を開催することになったとき、担当者ほどのような意識でその会議を組み立てるでしょうか。本気でやる会議であれば、できるだけ多くの関係する人が集まってもらえるよう、日程を含め、各方面との連絡調整を丁寧に行います。アライバイづくりのための会議であれば、主催者側がやりやすい日を決め、来る、来ないはともかく開催します。ありがちなのが、シナリオがあり、予め用意した資料を読み上げ、いくつか質問をもらうというような会議です。このような会議に参加する方も、声をかけられたから、予定が空いていたから、通知があったから出席するという姿勢にな

び岩手県ナンバーワンを維持していません。

「健康づくりは地域づくり」とか、「ソーシャルキャピタルの醸成で健康づくり」と言われ続けていますが、それらがいま一つストンと腑に落ちていない人が多いのではないのでしょうか。われわれも今回の結果が出るまで、正直なところ「人を健康にする地域とは何か？」というも自問自答してました。しかし、今は自信を持って言えます。「人を健康にする地域とは人と人がつながっている状態」「ソーシャルキャピタルが醸成された状態」だと。

りがちです。しかし、それでは何のために会議をしているのか分かりません。会議を開く以上、目的は何で、目的を達成するため、資料の準備はもちろん、当日の流れ、発表者との内容の確認、その日の落としどころなどを事前に時間をかけて用意することが大切で、参加者もそれぞれの立場で気がついたことを率直に語ってほしいと思います。

つなぐ手段になる 会議とは

では、どのように仕掛ければ会議が人をつなぐ、人がつながる手段になるのでしょうか。これまで開催してきた陸前高田市保健医療福祉未来図会議¹⁾では次のような流れで会議を開催してきました。

①未来図会議が目指すこと

自由参加の会議のため、毎回初めて参加するという方もいます。参加動機もさまざま、情報収集が目的だったり、友人に誘われたといった方がいたりします。最初からつながりづくりのために参加される方はほとんどいないというのが実感です。そのため、会議がつながりづくりのためのもの

人をつなぐ、 人がつながる手段

陸前高田市では絆（きずな）だけではなく、絆（ほだし）を含め、顔が見える関係性が構築され続けてきたことが今回の結果につながったと考えています。しかし、人のつながり方は多様化し、以前は、「つながる」と言えば実際に会ったり、電話で話したりすることでした。20年程前からはE-mailで、10年程前からはFacebookやTwitter、LINEでつながるのが当たり前となり、今こそ、どのように「つながる」



佐々木亮平
(ささき・りょうへい)



岩室紳也
(いiwamura・しんや)

岩手医科大学
衛生学公衆衛生学講座 助教
陸前高田市はまかだ運動推進
アドバイザー

●
連絡先：〒028-3694
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1
019-651-5111 (内線 5775)

ヘルスプロモーション
推進センター
(オフィスいわむろ)
陸前高田市ノーマリゼーション大使

●
連絡先：<http://iwamuro.jp>

であることを冒頭に毎回説明することで、「何のために」が確認され、会議の目的が少しずつ共有されてきました。

②テーマ・トピックス（共有したい事例、 事象）

テーマ・トピックス選びは会議を盛り上げるための要です。震災直後の未来図会議はまずはお互いの現状、状態を確認し合いました。情報を求めて集まった者同士が相互に発表することで会議はある程度つながりという意味でも成功しました。しかし、会議に集まらない方、会議自体の存在を知らない方も多いことを意識しつつ、今後に向けてつながりを持つことが重要と考えるさまざまな人たちに会いながら、双方方向のコミュニケーションを繰り返して行きました。この基本的なスタイルはフェイズが変わっても引き継がれ、そのフェイズに合わせたテーマやトピックスを探し続け、話していただける方に事前にお会いし、今とこれらを考え続けています。

③グループワーク

未来図会議の中で本格的にグループワークを始めたのは、震災後4年目のところから

図 未来図会議におけるネライを市保健師が説明



でした。全体で情報を聞くことで、自分の立ち位置や役割についてエンパワーされたいわゆる急性期と異なり、表面的には落ち着き、地域の変化が見えにくい時期になると、意識的、積極的に人と人をつなげる仕掛けづくりが必要だと感じるようになりました。会議の前半はテーマに合わせたトピックスについて情報共有の時間とし、会議の後半はそれを受け、実際の自分たちの活動につなげていくためにはどうしたらいいのか、グループワークを行いました。結論や最終的な答えにまでは至らなくとも、少しでも今日からこうしてみようと思えるような時間と場の共有に努めてきました。結果として、このグループワーク内の意見交換でお互いが相手を知り、会議後に名刺交換をする機会となりました。また各グループワークのファシリテーターを市の若い保健師さんたちが担ったことで、一人一人の顔が地域の人たちに見える関係性へと発展していきました。

会議の評価

東日本大震災は、「やったことがあることはできる、やったことがないことはでき

ない、もしくは時間がかかる」ということを教えてくれました²⁾。平時から人と人をつなぐことを意識して会議を開催した経験がある人は、非常時でもそのような会議を実際に開催するという発想になれます。岩室は保健所勤務時代、行政、関係機関、地域住民の方々と共に地域で精神障害者生活支援センターづくりに向けた議論を重ね、その会議がきっかけで家族会がNPOを立ち上げるに至りました。この経験後、会議では参加者が必ず一回は発言する会議運営を心掛けてきました。佐々木は、保健所運営協議会等、公的な会議を担当しつつ、精神障害者自主グループや家族会、子育て支援ボランティア、青年会議所とのAIDS予防・理解を含めた事業の企画会議、保健推進員から波及した健康運動サークル、ユニバーサルデザインによる人に優しいまちづくりのための協議会など、答えがありそうでない会議を担当してきました。

これらの中で大事にしてきたことは、結論ありきではなく、実態を知り、何をできるのかみんなで考え続けることでした。そのような経験があったからこそ、未来図会議を「人をつなぐ、人がつながる手段」と

考え続けられたと思います。また、未来図会議が継続し得たのも、事務局機能の中に、行政だけではなく、地域のさまざまな関係者で同じ方向性を見ている方々に自由に入ってもらい、それぞれの役割を考えられるようになったからだと思っています。

新しい未来図会議

まずは顔と顔が見える関係性が構築できる会議を経験することから始めてください。2018(平成30)年度から未来図会議は市役所の中で事業として明確に位置づけられ、担当者が決まり、これまで佐々木や岩室が行っていた事前準備や未来図会議冒頭の会議の意義の説明(図)を含め、市役所の若い保健師が引き継いだ新体制が構築されました。これまでも未来図会議の要となる、はまかだ(集まり、語り合う)運動を推進するため、はまかだスポットガイドやパンフレットの作成、地域の今を確認するために、市内の一般社団法人やNPO、市民と協議できる場を設けてきましたが、ここをはまかだ推進会議とし、未来図会議を企画運営する会議として正式に位置づけました。

今回、そこで発案された「他分野が仕掛けるはまかだ」というテーマで未来図会議を開催し、子どもたちのためのはまかだ、観光からみればはまかだ等の発表があり、地域に根差した、新しい巻き込みが実感できる未来図会議となりました。このように書く、担当を決め、新体制とすればすぐに実施、展開が可能であるかのように伝わるかも知れませんが、多くの方が経験されているとおり、ここに至るまでさまざまな場面や機会を若い保健師さんたちと意識、無意識に限らず共有し続けてきたからこそ、この一歩が踏み出すことができたのではないかと受け止めています³⁾。

コミュニケーション行爲

「つなぐ」と、「つながる」

は一見、同じように見えますが、実際には違います。哲学者ユルゲン・ハーバーマスは「自己中心的な成果を志向する戦略的行爲とは異なり、相互に了解を志向しながら強制なき合意形成を目指す言語行爲」(「広辞苑」を、「コミュニケーション行爲」と言っています。会議は得てして「自己中心的な成果を志向する戦略的な行爲」になりがちですが、ソーシャルキャピタルの醸成で求められているのは、未来図会議のように「相互に了解を志向しながら強制なき合意形成を目指すこと」といえます。「つなぐ」だけではなく、気がつけば同じ方向性を見ている「つながり」を、はまかだしながらこれからも模索し続けたいと思っています。

文献

- 1) 佐々木亮平, 岩室紳也. 災害を支える公衆衛生ネットワーク 東日本大震災からの復旧、復興に学ぶ・6. 「場」づくりを意識した企画調整機能の重要性, 公衆衛生, 2012, vol.76, no.9, p52-56.
- 2) 佐々木亮平. 被災地における被災者(住民・公衆衛生関係者)の支援活動 ~陸前高田市の現地調整・後方支援から~. 公衆衛生, 2011, vol.75, no.12, p43-46.
- 3) 佐々木亮平, 岩室紳也. 未来図を描く公衆衛生活動 in 陸前高田②復興中長期に不可欠な「財」育成とポピュレーションアプローチ, 公衆衛生, 2013, vol.77, no.9, p.49-53.